



**Data** 2021-154

監督：日向寺太郎  
 原作：周大新『安魂』  
 出演：ウェイ・ツー／チアン・ユー  
 ／ルアン・レイイン／北原里  
 英／チェン・ジン／シャン・  
 カンチョウ／サイ・シヨウイ  
 ／ホウ・トウカイ

## 👁️👁️ みどころ

ノーベル賞作家・莫言と同世代の中国人作家・周大新の同名の原作が日中国交正常化50周年の日中合作映画として、日向寺監督の手で映画化！

“安魂”とは魂を安んじることだが、原作者自身を体現した主人公(?)は、突然逝ってしまった最愛の息子の魂を探し求めて、如何なる行動を？“降霊術者”と聞いただけでインチキっぽい、いやいや、この父親のような“信念の人”こそ、それにハマりそう・・・。

興味深い物語の展開の中で導かれる結末は如何に？奇跡は起きるの？それは、あなた自身の目でしっかりと！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■ “中国国家第一級作家”の原作を周大新監督が映画化！■□■

私は中国人で初めてノーベル文学賞を受賞した莫言の小説『赤い高粱』や、それを張芸謀(チャン・イーモウ)監督が映画化した『紅いコーリャン(紅高粱)』(87年)、『シネマ5』(72頁)等をよく知っていたが、ほぼ同世代の中国人作家・周大新(1952年生れ)は全く知らなかった。彼も人民解放軍の軍人で、政府から「中国国家第一級作家」に認定されているそうだから、中国は広い。そんな彼の原作『安魂』を、なぜか『火垂るの墓』(08年)、『シネマ20』(280頁)等の日向寺太郎監督が、日中国交正常化50周年の日中合作映画として映画化することに。

### ■□■ 父子の対立と再生の物語！そう思っているとアレシ・・・■□■

父親の唐大道(ウェイ・ツー)は、原作者自身を体現するような有名な作家。社会的な名誉も地位も手に入れた大道は、自ら選んだ道こそが正しいものだと信じて疑わない信念の人(独善的な人?)だった。そのため、一人息子の英健(チアン・ユー)に対する教育も厳格で、今日は、息子が自宅に連れてきた恋人・張爽(ルアン・レイイン)について、「彼

女は農村出身だ。お前にはふさわしくない。」と完全拒否！おい、おい、今どき、それはないだろう・・・。

本作は、そんな父子の対立と再生の物語・・・？そう思っていると、突然、英健が重度の脳腫瘍であることが判明した上、あっけなく死んでしまったからアレレ・・・。本作は一体どんなストーリーに？

## ■□■安魂とは？そのやり方は？降霊術って本物？■□■

原作も本作も、タイトルは『安魂』これは、日本語では「魂を安んじること」だが、中国語でもそれは同じ。したがって、本作の焦点は、英健の死亡にもかかわらず、英健の魂はまだ自分の近くにいるはずだと信じ込み、キリスト教、イスラム教を含む様々な本を読み漁り、英健の魂を探し求める大道の姿になっていく。

そんな中、大道はある日、英健と瓜二つの若者・劉力宏（チアン・ユー）に出会うと、力宏に息子の姿を重ねることに。その挙句、大道は力宏と彼の父親代わりになっている叔父の劉万山（ジャン・リー）の元を度々訪れることに。「降霊術者」を名乗る万山らの仕事は「魂を呼び戻すこと」だが、それって本当？ひょっとして、そりゃインチキなのでは？

## ■□■女優・北原里英の挑戦とその中国語に注目！■□■

私は昔から女性アイドルが大好きだが、AKB48を卒業し女優として大成したのが、初代センターを務めた大島優子と、それに続いて『もらとりあむタマ子』（13年）（『シネマ32』125頁）で主演した前田敦子だ。しかし、本作には、2018年にAKB48を卒業した後、舞台、ドラマ、映画に挑戦している北原里英が、爽の友人になる日本人留学生・星崎沙紀役で登場し、全編中国語のセリフに挑戦しているのでそれに注目！

傷心の爽と偶然知り合っただけの沙紀が、本作のような重要な役割を果たしていく脚本には少し違和感があるが、彼女の漢語は私でも十分聞き取れるのでうれしい。しかし、沙紀の意見を聞くまでもなく、誰がどう見ても力宏と万山の「安魂商売」はインチキだとわかるはずだ。しかるに、なぜ大道は次々と大枚を注ぎ込んで“安魂”にのめりこんでいく？本作はそこらあたりの展開がキモだが、妻・胡瑞英（チェン・ジン）の忠告をあくまで無視し続ける大道の姿に、私はアレレ・・・。

## ■□■安魂商売のインチキ性とは本作に見る奇跡は？■□■

中国語の「騙（ピエン）」は「騙す」という意味で、「詐騙（ジャー・ピエン）」は日本語の詐欺と同じだ。しかし、力宏や万山がやっている“安魂商売”は、きっと詐欺！そう確信している大道の妻・瑞英は、恐る恐る大道の後について安魂の現場（？）に臨んだが、そのインチキ性は如何に？

作家・周大新が『安魂』というタイトルの小説を書いたのは、どうしても息子の死を受け入れることができない父親と、死んでしまった息子との間で、親子とは？死とは？魂とは？生命の繋がりとは？そんな根源的な問いを突き詰めるためだ。したがって、そんな物語の結末が「詐欺師、逮捕！」で終わるはずはない。

本作の公式パンフレットでは、「しかし、息子にもう一度会いたいと願う強い気持ちは一つの奇跡を起こすことに。」と書いている。さあ、そんな本作の結末は如何に？それは、あなた自身の目でしっかりと！

2021（令和3）年11月10日記